

大学教育学会 課題研究活動報告書 (2024 年度)

提出日 2024 年 3 月 25 日
報告者 福留 東土

課題研究テーマ	大学教育・経営人材の育成とプログラム開発に関する研究
代表者 (所属)	福留東土 (東京大学)
メンバー (所属)	福留東土 (東京大学)、井芹俊太郎 (神田外語大学) 河本達毅 (桐蔭横浜大学)、木村弘志 (一橋大学) 戸村理 (東北大学)、蝶慎一 (香川大学) 中世古貴彦 (九州産業大学)、水野 (林) 貴子 (東京大学) 栗原郁太 (東京大学大学院)、松村彩子 (名古屋大学)
担当理事	鳥居朋子 (立命館大学)
コメンテーター (所属)	寺崎昌男 (東京大学・立教大学・桜美林大学 (名誉))
実施した活動	<p>2023 年度の活動は、大きく以下の 3 つであった。</p> <p>① 大阪大学で開催された第 45 回大会でラウンドテーブル「大学教育・経営人材と育成プログラム」を開催した。 以下の 5 名が登壇した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 福留東土 (東京大学)「趣旨説明」 ・ 木村弘志 (一橋大学)「大学教育・経営人材の仕事の特徴と、大学院レベルのプログラムに期待される内容」 ・ 水野 (林) 貴子 (東京大学)「高等教育の大学院プログラム (修士課程)における修士論文作成のインパクトについて (自己省察)」 ・ 松村彩子 (名古屋大学)「大学職員のアイデンティティ発達と大学院プログラム」 ・ 中世古貴彦 (九州産業大学)「大学院プログラムだからこそ学べること」 <p>議論の論点として主に、(1)大学院プログラム学習者の視点、および(2)大学職員研究の視点を設定し、この 2 点について、各報告者の研究と経験に根差し、議論を深めた。水野報告、中世古報告は主に上記(1)に、木村報告、松村報告は(2)に該当する。</p> <p>② 2023 年 10 月、第 22 回東京大学ホームカミングデーにおいて、大学経営・政策フォーラム主催により、「大学経営・政策コース修了生×現役教員 トークセッション」を開催した。このトークセッションは、2016 年以降、毎年ホームカミングデーに合わせて開催しており、2023 年が 8 回目であった。今年度のテーマは「コース創設 20 周年に向けて振り返る、私の大経生活」と設定した。話題提供者、コメン</p>

テーター等は以下の通りである。

<話題提供>

- ・ 長島弥史郎（一般財団法人日本開発構想研究所）
- ・ 渡辺伊織（立教大学）
- ・ 阪倉みのり（学校法人三幸学園）

<コメンテーター>

福留東土（東京大学）、両角亜希子（東京大学）

<司会>

佐藤寛也（東京大学）

③ 北陸大学で開催された2023年度課題研究発表会における課題研究シンポジウムで、最終年度の総括的な報告を行った。

登壇者と報告タイトルは以下の通りである。司会は課題研究メンバーの蝶慎一（香川大学）が務めた。

- ・ 福留東土（東京大学）「趣旨説明」
- ・ 戸村理（東北大学）「大学教育・経営人材の育成プログラムの設計理念と実践」
- ・ 井芹俊太郎（神田外語大学）「大学教育・経営人材育成プログラムを考えるための新たな大学院修了生調査の検討」
- ・ 松村彩子（名古屋大学）「大学教育・経営人材のアイデンティティ形成とキャリア」
- ・ 福留東土（東京大学）「高等教育分野の研究・教育組織としての大学院：アメリカから得られる示唆と日本の課題」

以上の報告を受けて最後に、本課題研究の担当理事である鳥居朋子会員（立命館大学）から「プログラム開発における評価フェーズへのまなざし」と題して指定討論を行っていただいた。

シンポジウムの報告では、論点として以下の4点を設定した。(1)大学教育・経営人材の育成プログラムの設計理念と実践、(2)大学職員研究の知見と修了生調査にみる論点、(3)大学教育・経営人材のアイデンティティ形成とキャリア、(4)高等教育の研究・教育の組織基盤：国際比較と日本の課題。戸村報告が(1)に、井芹報告が(2)に、松村報告が(3)に、福留報告が(4)に該当する。

成果	<p>最終年度の活動においては、主に以下の 5 点の論点に沿って議論を行ってきた。以下、課題研究に取り組んだ 3 年間の成果を含めて論点ごとの概要を記す。</p> <p>① 「大学院プログラム学習者の視点」 これまで、大学内の様々な領域で仕事をしている修了生から、大学院教育を受けた経験やその成果についてコメントをもらってきた。彼らの職務領域は、研究支援、学務、IR、副学長・事務局長、教員など多岐に渡る。大学院での学びを通じて修了生がさまざまな能力を高めていること、さまざまな面に波及効果があることが分かってきた。</p> <p>② 「大学院プログラム教育者の視点」 本課題研究のコメンテーターを務めていただいた寺崎昌男会員が提示されたミニマムエッセンシャルズ（①大学の本質への理解、②自校理解、③大学政策への理解）を基礎として検討を重ね、大学教育や経営を巡る知識領域や考え方について、教えるべき内容はある程度見えてきた。さらに、大学院教育における修士論文の重要性が議論の中で繰り返し提示された。かりに研究テーマが実務的なものであっても一度アカデミックなプロセスに乗せることの重要性、アカデミックな研究を体験することの重要性が提起された。また、現行の東京大学のカリキュラムは、大学経営・政策に関するアカデミックな知識領域を、一定程度カバーしているといえるが、異なるパースペクティブからさらに追加できるものがあるかもしれないといった議論が行われた。</p> <p>③ 「大学経営研究の視点」 大学院教育以上に実践的観点を重視することが多い履修証明プログラムや、マネジメントの観点を重視したプログラムの事例を取り上げて議論し、大学教育・経営人材の育成に関わる示唆を得てきた。所属機関における教育改善・改革課題を持ち寄り、プログラムでの学びを経て、実現可能性の高い改革案を練り上げることを求めるプログラムや、イノベーション志向のもと新たな実践知を生み出す力を習得させるプログラムの事例を提示してもらってきた。それらを巡る議論を通してみえてきたのは、履修証明プログラムでは、論文作成というアカデミックで重たい課題がない分、より実践的な課題を重視したアプローチ、すなわち、日常的な実務上の課題を議論の俎上に載せながら議論し、課題発見・解決を図る方法が取られていることである。大学院プログラムでも、修論に加えて、より実践的な演習的内容をカリキュラムに付加することはプログラムの価値を高める上で重要かもしれない。</p> <p>④ 「大学職員研究の視点」 大学職員研究の先行研究を参考にしながら、先に提示したミニマムエッセンシャルズを含めた明示的な知識・理解について議論を行ってきた。</p>
----	--

	<p>た。その上で明示的な知識だけでなく、目に見えない基底部分を含めた全体的な理解が重要であるという観点も提起された。態度、マインド、人間力（教養）、大学や教育に関する思念的な部分など、明示的でない知識・理解を含めて大学院教育にはどのような能力の育成が必要なのだろうか、そのための方法を含めてさらに議論が必要である。また、もうひとつの重要な論点として提起されたのが、職員あるいは大学経営専門職のアイデンティティ形成のアプローチである。能力形成や知識獲得という観点だけでなく、内面的アイデンティティ形成が何によってもたらされるかという観点は、知識・能力に重点を置いてきた大学職員論に新たな観点を持ち込みうるかもしれない。</p> <p>⑤ 「国際比較の視点」</p> <p>国際比較については主にアメリカの高等教育プログラムに関する調査を行った。イギリスについても言及する機会があったが、十分な検討には至らなかった。アメリカは高等教育プログラムの数が多いだけでなく、各プログラムの規模が大きく、専門科目の提供、プログラムの専門化の程度が進んでいる。また、研究大学を中心とする大規模大学以外での多様な大学でのプログラムの開設・拡充を支える、学会によるガイドラインの作成が進んでいる。他方、PhD プログラムを除いて、論文執筆はあまり重視されていない。日本にとって教育内容の面で参考とすべき点が多いが、日本の場合、教員・学生の規模との関係もあり、科目提供の範囲には限界もある。日本の特性を活かしたプログラム編成はどうあるべきか、国際比較を参考にしながら引き続き検討していく必要がある。</p>
<p>残された課題</p>	<p>課題研究のテーマを巡って残された課題は多い。上述した 5 つの論点それぞれにやり残したことがあり、今後も継続して本課題研究のテーマに取り組むことでさらに研究を発展させ、大学院をはじめとする大学教育・経営人材の育成プログラムの発展に貢献していきたい。</p> <p>各論点を巡る内容的な課題以外に、研究の進め方についても課題が残った。ラウンドテーブルや課題研究集会での発表者について、もっと幅広い観点から人選できるとよかったと考えている。大学職員育成プログラムに関わる教員という観点からはかなり幅広く人選できたものの、プログラムの受講者としては、ほぼ東京大学の大学院プログラムの受講者に限定された。ある程度共通の土俵で議論する上ではやむを得ない措置でもあったのだが、人選をする前提となる共通の議論の土台作りが十分にはできなかったという反省がある。今後、さらに議論を進めていく上での課題としたい。</p> <p>最後に、本課題研究の遂行に当たって協力いただいた関係者の皆様に御礼を申し上げたい。とりわけ、担当理事をお引き受けいただいた鳥居会員、コメンテーターをお引き受けいただいた寺崎会員には多大な貢献をしていただき、お二人の存在なくして本課題研究の遂行は不可能であった。記して謝意を表したい。ありがとうございました。</p>